

痛い合宿でした。人数は八人(次は小早川
 久保田、佐々見、京谷、佐藤、ツなが、
 三ヶれどもが六人一人で一致団結して現
 得める合宿は三週間を越せたこと、大
 変有意義な事でした。人数が少なくて練習
 に二たえ苦しかったが、休時間には家産料
 室の横でぶ、倒れて涼風を少し、味は
 たのも忘れられませんが、苦しいばかりは
 なく、第一日目、前の宿直室で小久保先生
 や衛藤先生、その他中江さんをお話を聞
 くと、これに電話の事も、今でも思い出すと小
 き出し、二日目、二Aの教室で、男
 子の先輩を交えてトラコをしたり、恋愛
 話をしたりして充分楽しかった。キーパー
 としての思いは、水柱にして、フオワー
 ドに変わってからの事を言こうと思つたので
 が、三年になつてやり始めて試合経験もツ
 いし、フオワード一年生が、偉そうに話を
 ぶくのし何で、のびのびめです。
 高津ハンドボール部の活躍を期待しつつ、
 ！

完



私のクラブ生活

佐々見淑子

私がハンドボール部に入部したのは、一
 年生の二学期も終りに近い十二月だった。
 その頃は一学期や、二学期の始めには違つ
 て、何か運動クラブに入つて、激手は暑か
 たいという強い欲望も、幾分薄れ、それ迄
 私ちうこちうのクラブを、軽々として来てい
 ただけに、慎重に、今度こそ着着けるクラ
 ブに入りたいという願ひも強かつた。当時
 ハンドボール部は部員が他の女子運動クラ
 ブに比して少なくて、又、一応校内大会とい
 う競技を通して、勧誘された私であつた為
 か、待遇も良かったし、又ハンドボールと
 いうスポーツ自体の持つスチールの下ささ
 に魅せられて、練習は厭いかつたけれど、
 さ程苦にはなつたか、た、それでも、入つ
 て日の、或いは、熱心な二年生の人達を見
 るにつけ、よくまあ、鈍さもせんとかボラ
 ンと、練習しはるや、よっぽど、暇やネ
 ーニナ、と思つた程、私にも、て、クラ
 ブ活動は、意味を持たつたか、た、り、で、
 今から思つて、クラブというものを、適当
 に楽しむ為のもの、と理解して、いた、それ迄
 の、クラブ活動に對する根本的な思い違ひ

が、私をそれ迄、どのクラブにも、留ませ
 ないでたのであろうと思つた。一年の三学期
 頃から、二年生にかけては、私にとつて、
 ハンドボールは、遊び事ではなかつた。明
 けても暮れても、クラブ活動が、私のすべ
 てであり、いそがしいのであつた。しかし、そ
 んな夢中の状態ばかりで統へられなかつた。と
 言つのは、私のそんな我夢シラの気持に
 比して、技術の方は、ある期間を過ぎてし
 まうと、一向に、伸びてくれないのである。
 毎日、練習してゐるにもかゝらず、ジヤ
 ニブシュートは、依然として、カバ入らな
 い。フットボールの命である、ホーマーシ
 ョンの動は、ゆるかたつた。そして先輩に
 も、当然の事だが、「キーパーと代わろ」と、
 言われて、又、我ながら、自分の能力の限界を
 感じて、涙を流した事も、しばしばあつた。
 一かゝり、その頃に行くと、合宿や練習を
 通じての友人関係や、クラブを通じて起
 る精神的な問題等によつて、色々真剣に
 考へた。人間、精魂つき果てると、本来の
 その人の性格の有りの尽が、表われるもの
 である。合宿を通じて、又、甚しい練習を
 通じて得た友人が、私には、一生の友とな
 る様に思えてた。合宿の夜、ボソ／＼
 と遅く迄、恋愛論を話つたり、又、早く
 寝ついたりするの、寢言に、耳を澄ましてクス

クス笑つたり、忘れた水筒の思い出が、
 「う」／＼として広がる。夏の合宿では暑
 さい中に、水も飲めず、ノドがカラ／＼に
 いかうびて、それでもホーマーシューンは手
 加減さねず、只、只走り込んで、汗が出る
 思いをし、た事もあつた。又、練習の後ゴロ
 と高台に仰向けに寝ころび、空を見ろ。ど
 こ空も、登りきつた青空に、白い雲が、ユ
 ツタリと漂い、木々の薄緑が目に入り、
 そんな時、普段忘れてゐる自然の美しさ
 、あ然として来う。考へてみると、クラ
 ブ活動と共に、私の高校生活は、広ばつて
 来た様である。勉強一本に、ぼろ／＼に、ク
 ラブに入つて、苦しみ、楽しみ、暴れ、私
 の若いエネルギーを、思いっきり、発散さ
 せ、高校生活を意義ある、ものにしたい
 う事だけだ。短く、短い、クラブ生活では有
 ったけれども、以後の私にとつても、多
 くに、プラスに打つるものと、信じて疑わな

